

第 26 回光学五学会関西支部連合講演会参加報告

菊 田 久 雄

大阪府立大学工学部 〒593 堺市学園町 1-1

本年度の光学五学会関西講演会は、2月5日に大阪三田出版会の大会議室にて行われた。本講演会は日本光学会、日本色彩学会関西支部、日本写真学会西部支部、日本分光学会関西支部、照明学会関西支部の五つで共催している年に一度の講演会で、本年で26回目の開催になる。今年もいろいろな学会から合計92名の参加者があり、関西講演会にもかかわらず他の地域からの参加者も含まれていた。また、一般の講演会に比べて、例年、女性研究者の参加が多いことも本講演会の特徴である。

今回は「イメージの創造と表現 (現実感を求めて)」というテーマで、4件の講演が行われた。リアルな表現技術としてのコンピュータグラフィックス (CG) や仮想現実空間 (VR) についての話題、および印刷機や CRT など種々の画像表示装置間における色再現の技術について取り上げられた。

最初の講演では、洪博哲氏 (コニカ) により異種メディア間の色再現について話があった。写真界、印刷界、テレビ界ではそれぞれ異なる色の物差しを持っている。ここではデジタル信号を媒介としてこれらの異なるメディア上で同じように見える画像を再生するための技術、およびその問題点について解説された。特に色再現においてカラーコピーとカラープルーフという二つの考え方が指摘され、色予測・色変換などの再現技術について詳しく述べられた。

二番目は、岸野文郎氏 (ATR) により「人物像のリアルな表現」という題で臨場感通信会議についての講演が行われた。単なるテレビ会議でなく、参加者が同じ場の雰囲気を感じられるような会議空間を実現するための試みである。講演では、人工現実感 (バーチャルリアリティ) のための人物像のリアル表現、動作の認識・再生の

方法について解説された。また、実際の再生像をビデオで紹介しながら、これまでの研究成果と残された問題点について説明が行われた。

三番目は、大村皓一氏 (大阪学院大) が「コンピュータグラフィックスと感性」という題で、CG アーティストがコンピュータを使ってどのように感性を表現していくかについて述べられた。絵の具や筆としてのコンピュータ、キャンバスとしての CRT 画面、グラフィックスプログラムの作成とその作成時における偶然性などについて、CG 作家との対談 (ビデオ) を通して説明がなされた。また、ある CG 作家を例に、その作品の移り変わりを紹介しながら、感性を表現することの難しさを示された。

最後の講演では、野村淳二氏 (松下電工) により「住空間性能疑似体験システム」の題でバーチャルリアリティ (VR) 技術を用いた住空間シミュレーション装置が紹介された。これは居住性能を設計段階で予測するために開発されたものであり、VR 技術の具体的な応用例である。また、VR 技術によるビジュアルな表現だけでなく、音響の立場からの3次元音響シミュレーションシステムについての紹介もあった。

今回の講演内容は人間の感覚を対象としたものであり、仕事がハードに片寄りがちな著者にとって、ものの考え方や進め方は非常に興味深く新鮮であった。また、ビデオを用いた講演が多く、専門外の人々にも理解しやすいように構成されていた。

なお、今回の講演予稿集には若干の残部があります。希望の方は松下電器・照明研究所の田辺吉徳氏 (06-906-4886) までお問い合わせください。

(1993年4月5日受理)